

マンチェスターで取材をしていたとき、こんな出来事があった。歳の頃は20代後半。赤毛のアンをちょっとふくよかにしたような女性に「応援しているクラブは?」と質問すると、聞いたこともない名前が出てきた。こちらが面喰らっているのを見て、彼女は「3部のバリーです」と笑いながら付け足してくれた。日本でマンチェスターといえば、まずはデイヴィッド・ベッカムのいるユナイテッドが挙がるだろうし、サッカーに詳しい人なら(マンチェスター)シティや、西澤明訓選手がいたボルトン・ワンダラーズの名前を口にするかもしれない。でも彼女が応援していたのは、マンチェスター北部に隣接する小さな街のクラブだった。

だが彼女はいわゆる「マニア」でも「オタク」でもない。イギリスには、地元の人しか知らないような小さなクラブを地道に応援し続けるファンが山ほどい



地元クラブを
応援する
ファン



試合が
終ってハワイイ
サッカーの話で
盛り上がってる
ファン

フットボール 英国式蹴球の味わい方

3 40000のクラブを支える誇りと愛情

田邊雅之◎文
根本 孝◎イラスト



小さいときからクラブへ入って練習する子供たち

たなべまさゆき／1965年生まれ。
スポーツのほか音楽や映画等のジャンルで
ライター・編集者として活動中。
イギリスとのファーストコンタクトは音楽を通して。
現地のフットボールファンの熱狂ぶりに
当初は面喰らったが、取材で「つらい日常を一時でも
忘れさせてくれるものが必要じゃないか」という
コメントを聞き、自分にとっての音楽と同じ意味を
持っているのだと納得。
以後、一気に思い入れが深まった。
イギリスの食事はイタリアやスペインに比べれば
レベルは低いかもしれないが、巷で言われているほど
ひどくはない、というのが持論。
訳書に「サッカー株式会社」(文藝春秋)、共訳書に
『ブライアン・グランヴィルのワールドカップ・ストーリー』
(新紀元社)などがある。

る。ファンとクラブの絆は、日本で考えられている以上に深い。

理由の一つはクラブの数だろう。どの街に行ってもまず間違いなくプロのクラブがあるし、フットボールグラウンド(スタジアム)もそれこそいたるところにある。イギリスのクラブの数は、ヨーロッパの大陸諸国と比較しても群を抜いている。イングランドを例に取れば、プロのトップリーグにあたるプレミアシップに20チーム、その下に位置するフットボールリーグには、1部から3部まで各24チームが所属している。この時点でクラブの数は既に92だが、この下にもセミプロのリーグ等が延々と連なっていく。フットボール・アソシエーションに登録されているクラブの数は4万を超えるという。

しかもこれはイングランドに限った場合の話で、スコットランドやウェールズ、北アイルランドにも複数のディビジョン(部)から構成されているリーグがある。観衆に関しては、イギリス全土で毎週60万もの人々!!がグラウンドに出かけるという統計さえある。まさにイギリス恐るべしだ。

ただし、ファンとクラブの絆の深さには他の要因もある。イギリスではどんなに弱ろうと無名であろうと、地元のクラブや家族が代々応援してきたクラブに

対して、一貫して愛情と誇りを持ち続けるのが本来のあり方だとされてきた。有名な選手がいるから応援する、あるいは強いから^{ひいき}最上のチームにするというファンもいないではないが、こういう態度は昔からのフットボールファンに言わせると「わかつちやいない」ということになるらしい。だからこそ、小さなクラブでも時代の波に流されずに生き残り続けることができたのだろう。

自らのあり方に誇りと愛情を持ち続けているのはクラブ側も同じだ。小学校の校庭のような小さなグラウンドしか持たないところでも、メインスタンドの屋根にはクラブの名前とエンブレム（紋章）が堂々と描かれているし、オフィスには、これまで獲得したトロフィーが誇らしげに飾られている。ここで特筆すべきは、ファンであれクラブであれ、地方の小さな街に行くほど雰囲気が温かくなることだ。グラウンドに試合を見に行けば「どこから来たんだい？」と誰もが親しみを込めて話しかけてくるし、クラブのスタッフも、おいしい紅茶でもてなしてくれたり、セピア色の写真を指差しながら今日までの歩みを嬉しそうに説明してくれたりする。こういう雰囲気は、大きなクラブでは決して味わえない。

日本のフットボール界でも、最近では草の根への定着云々ということが言われるようになってきたが、本場のイギリスに比べると道のりはまだまだ遠い。熱しやすく醒めやすい僕たちは、何かがブームになればこれまで身近に感じていたものなど忘れ去ってしまうし、フットボールの分野でも、スター選手をたくさんそろえた強いチームが現れ



さすがサッカー発祥の地
エンブレムに歴史が...



歴代選手の写真が
飾られている？



孫を連れてサッカー観戦へ
行くお爺さん。

れば、すぐそちらに^{なび}靡いてしまう。

もちろん、スポーツは弱肉強食の原理に基づいているから進歩するわけだし、世の中というものは、常に有名なものや強いものに牽引される形で発展してきた。そういう意味では弱いクラブを応援し続けるのは非効率的だし、アナクロニスティックだと言われてもしかたがないかもしれない。シニカルな見方をする人の中には、イギリスの地方のファンが小さなクラブを応援し続けるのは、生まれた家庭や出身校で一生がほとんど決まってしまう階級社会の中で、一般大衆が立身出世^{あきら}を諦め、自分のライフスタイルに満足する方法を見いださざるを得なかったのと同じだと主張する人さえいる。

でも、僕は片田舎の小さなクラブを熱心に応援し続けるファンに出会うたびに、一種の尊敬と羨望の念が入り混じった感情を抱いてしまう。いたずらに上昇志向に身を委ねるのではなく、しっかりと地に足に据えて、自分の故郷や生き方を大事にしていこうとする「誇り」が感じられるような気がするからだ。

親から子へ、子から孫へ、郷土に対する誇りとクラブへの愛情は着実に受け継がれていく。白髪のお爺^{じい}さんが、よちよち歩きの子供の手を引いて小さなグラウンドへ向かっていく姿は、大好きな光景の一つだ。

12

December 2002

NHK **テレビ**

英会話

2002年12月1日発行 (毎月1回1日発行) 12月号 第40巻第9号
昭和61年8月30日第三種郵便物認可



教育テレビ

◎放送



午前7:10~7:30

◎再放送



午後0:30~0:50



午前0:00~0:20 (水曜深夜)



GOAL!

[青春のロンドン・レンジャーズ]

平野次郎 / Debi Collis

